

めあての提示や振り返りの工夫で、子どもが自ら学ぶ力を育む

九州大学大学院 人間環境学研究院 准教授 **伊藤崇達** たかみち

学習評価の新しい3観点の1つである「主体的に学習に取り組む態度」では、学習に関する自己調整（自己調整学習；self-regulated learning）にかかわるスキルが重視されている。その基本的な考え方と、授業づくりのヒントについて、九州大学大学院の伊藤崇達准教授に聞いた。

自己調整学習の3要素 メタ認知・動機づけ・学習方略

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、国の通知では、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を身につける学習において、「粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうか」をポイントに挙げています*1。この、「自らの学習を調整しよう」とする学習を、教育心理学では「自己調整学習」と呼びます。理論的には、**メタ認知・動機づけ・学習方略**の3つの要素（図1）を、学習者自身が能動的に進めていく学習を指します。言い換えれば、この3つの要素を備えていると「自己調整学習ができています」状態だと考えられます。心の内にあるメタ認知と動機づけを両輪として駆動させ、主体性を発揮して学習方略の実行をしていくイメージです。

メタ認知が発達するのは、小学校高学年からと言われていますが、その土台は幼児期や小学校低・中学年から築かれます。幼児期の遊びやお手伝い、小学校低・中学年における基本的な学習方略を用いた学びを繰り返し、目標を実現する経験を積み重ねることで、その後のメタ認知が発達していきます。

子どもが予見・遂行・省察を回す、教員の働きかけとは

自己調整学習をうまく進めるためには、**予見・遂行コントロール・自己省察**の3つのステップを回していくことが重要です（図2）。

予見（見通し）とは、学習の下準備にあたり、目標設定や学習方略の計画を行うプロセスです。課題への関心や自己効力感も必要となります。

遂行コントロール（深め進める）と



いとう・たかみち
京都教育大学教育学部准教授等を経て、現職。博士（心理学）。専門は教育心理学、教授・学習心理学。主著に、「学生を自己調整学習者に育てる：アクティブラーニングのその先へ」（共同監修・翻訳、北大路書房）、「自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術」（共著、北大路書房）など。

は、学習方略を行う中でうまく学習できるよう集中したり、順調に進んでいるかを観察したりするプロセスです。

自己省察（振り返り）とは、学習後に成果の自己評価を行うことであり、成功も失敗も自分の行動の結果として受け止めます。ここで学習方略の問題点に気づけば、次の学習の予見（見通し）に反映させることで、学びのサイクルが成立します。

この3つは、個別には既に多くの先生が実践していると思います。授業のめあてを示す、問題の解き方を

図1 自己調整学習の3つの要素

学習方略 「認知」と「情意」の両面がある。認知的方略は、学習内容を理解するためにまとめたり関係づけたりする、記憶や思考に関する方略。情意的方略は、やる気のない時や学習がうまく進まない時にどう気持ちを立て直し、学習し続けていくのかなど、意欲にかかわる方略。

動機づけ 心理学において、行動を起こさせ、維持し、方向づけ、収束するまでの過程全体。自ら学習活動を進めるためには、「仕方なく」「やらされて」という外発的動機づけだけでなく、「大切だから」「自分がしたいから」「面白い」などの内発的動機づけが必要。単に漢字の読み書きができるだけでなく、そこに楽しさや意義を認め、価値を実感できた時、強固な内発的動機づけとなる。



メタ認知 学習計画を立て、進み具合をチェックし、その結果を評価するなど、自分の学びがうまく進んでいるかどうかを観察し、自分で調節していくこと。

*伊藤准教授提供資料を基に編集部で作成。

*1 2019年3月29日付「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」。

図2 自己調整学習の循環的・らせん的なサイクル

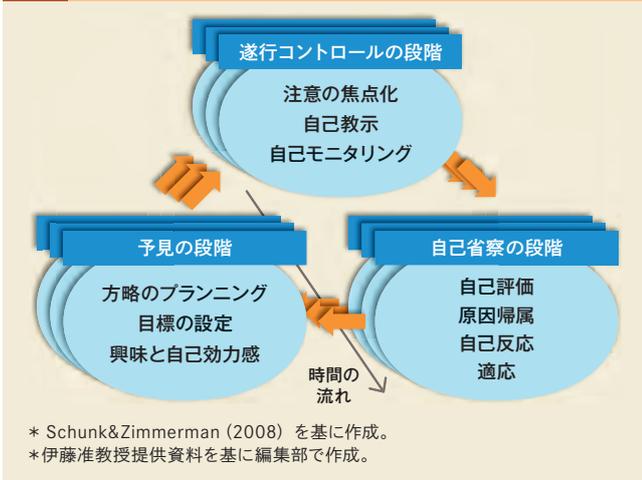


図3 評価論を踏まえた3つの振り返り

振り返りの種類	振り返りの内容
診断的振り返り	これから学習に向かう見通しとしての振り返り <ul style="list-style-type: none"> 前提となる知識や概念が分かっているか？ 学習の目的は？ 学習の進め方は？(学習方略の活性化)
形成的振り返り	学びの途中段階で行う「小さな振り返り」 <ul style="list-style-type: none"> ここまでの達成状況と今後すべきことは？ ダイナミックで、学びの進行とともに行われるもの
総括的振り返り	授業の最後に行う、いわゆる「振り返り」 <ul style="list-style-type: none"> 学習目標を達成したかというチェックとしては有効 しかし、学べなかった時に軌道修正ができない

* 伊藤准教授提供資料を基に編集部で作成。

教える、学習内容を振り返らせるといったことです。それらを、学習のサイクルとして回し続けることを意識して指導すると、自己調整学習力がより高まります。

例えば、めあての提示では、学習内容を示す「結果の見通し」に加えて、どのような方法で解決するのかという「過程の見通し」を示したり、一緒に考えたりすることで、子どもはより明確な見通しを持って学習に臨めます。振り返りも、学習のまとめや授業の感想だけでなく、疑問やさらに知りたいことまでを言語化させると、子どもは次の学習を見通せます。

そのように、教員が支援しながら3つのステップを繰り返し、子どもに内面化させることで、自己調整力は育まれていくのです。

学びのサイクルを促す振り返りの工夫

子どもが自己調整学習を行えるよう、類似の問題に直面した時に、それを解決できる活動を授業中に組み込むことも大切です。

その1つである「教訓帰納」*2という方法を紹介します。それは例えば、解けなかった算数の問題で、正答とその計算式を書き写させるだけでな

く、なぜ解けなかったのかも子ども自身に考えさせ、書き出させるといった方法です。自分の間違いを明らかにして教訓とし、内容だけでなく学習方略まで意識させるといった方法です。「誤解」「正しい概念、解き方」の双方を認識することは、同じ間違いを繰り返させないことにも効果があります。

協働学習の振り返りでは、他者との意見交換を踏まえて、自分の意見と対立する意見を書き出し、対比させる「対話的な振り返り」を行うこともお勧めです。1つの事象を多様な視点から省察することで、メタ認知を高めることができます。

なお、振り返りは、最後に行う「総括的振り返り」のほかに、学習の目標や進め方、必要な前提知識など、学習の見通しをつかむための「診断的振り返り」、学びの途中に達成状況と次にすべきことを考える「形成的振り返り」があります(図3)。通常、診断的・形成的振り返りは、教員の発問や見取りによって、教員自身が子どもの状況を把握することで行っています。しかし、教員主導の学習だけでは、子どもはやらされている感から、受け身の姿勢が強まりかねません。子ども自身が診断的・形成的振り返りを行う機会を計画的に組み込むことがあってもよいでしょう。

認知特性に応じた学習方略の使い分け

欧米を中心とした最新の研究成果では、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導の重要性が注目を集めています。子どもの認知特性には、視覚優位、聴覚優位などの違いがあります。例えば、一斉指導型授業では、耳に入ってくる言語を一つひとつ順番に理解する継次処理が重要になります。聴覚優位の子どもは授業についていけますが、同時処理の方が得意な視覚優位の子どもは、授業を理解できていない可能性があります。

常に個別指導ができなくても、授業のユニバーサルデザイン化を意識した一斉指導の工夫は可能です。教科書を説明する場面で、視覚化・構造化して板書できるところはどこか、スモールステップかスパイラルに展開するのか等、先生方が各教科の本質や学習の意義を理解し、子どもの様子や場面に応じて多様な学習方略を伝えられるようにしたいものです。

日本では以前から、学習意欲に支えられた「自ら学ぶ力」が重視されています。今後も、単にリテラシーを育むだけでなく、生涯にわたって学び続ける力や意欲を育む授業づくりに取り組んでいただければと思います。

*2 問題を解決した後に、その問題をやったことで何が分かったのかを学習者自身が抽出すること。